第8章

一九六〇年前後の〈東北〉表象と石坂洋次郎編『詩・文・写真集　津軽』

森岡　卓司
（山形大学学術研究院）

一　「詩・文・写真集」としての『津軽』

新潮社から一九六三年一〇月に発行された、石坂洋次郎編『詩・文・写真集　津軽』（以下本稿においては『津軽』と略記する）は、石坂洋次郎（一九〇〇―一九八六）の既発表作から採られた一一編の散文、高木恭造（一九〇三―一九八七）の詩集『まるめろ』（「北」編輯所　一九三一・一〇）に収録されていた一〇編の詩、そして小島一郎（一九二四―一九六四）の写真四七点によって編まれている。発行当初から、新聞や週刊誌等の紙面で好評をもって迎えられた本作は、こうした量的な構成の問題、そしてなにより収載の写真群が与える強い印象によって、小島の写真集としての側面を高く評価される傾向にあった。小島の写真の代名詞とも言われる黒々と焼き込まれた空と白い雪の地面とのコントラストが際立つ収録写真一点を掲げながら、「読むというよりもながめ楽しむ書」であり「その意味で小島氏の写真はよく使命をはたしている」と本書を紹介する『読売新聞』の記事[1]などは、その典型のひとつであろう。

また、この書の成立過程において、小島の関与が極めて大きかったことについても、既にいくつかの指摘がある。編者を務めた石坂は、出版に先立って発表したエッセイ[2]の中で、「地味な忍耐づよい編集は、もつぱらＳ君（引用者註：新潮社の佐野英夫）と小島君とで担当してくれた」と述べている。また、現時点で最もまとまった小島一郎論を著している高橋しげみも、新潮社の写真部にいた小島の弟小島啓佑が、「東京での仕事の不振に苦悩する兄を見るに見かね、何とか活動を軌道に乗せてやりたい」という思いで兄一郎の写真を佐野に見せたところに本書の出版の機縁があったと指摘した上で、次のように言及している。

この写真集の編集にあたって小島は、過去に撮りためた津軽の写真約３００点を見直し、そこから50点弱を選び出した。『津軽』に使われたイメージで、現存するオリジナルプリントの中には、裏面に本人の字で、ともに編まれる詩や散文のタイトルが記されているものがあり、編集への写真家の積極的な関与がうかがえる。結局、この詩・文・写真集『津軽』が小島の生前唯一の写真集となった[3]。

小島一郎は、一九五六年に、彼が終生師と仰ぐこととなる名取洋之助と出会うことでその才を見出され、一九五八年六月に東京小西六フォトギャラリーで個展「津軽」を開催し、その名を写真界に知られた。高橋は、小島の「造形性への志向」に、「構成派」に心酔した父・平八郎から受け継いだ西洋モダニズム的な資質」の影響が存在する可能性を指摘している[4]が、そうした資質と志向性とは、書籍『津軽』においても、たとえば、輪の影というモチーフでつながる三二―三五ページのシークエンス【図1、2】、地蔵と童子

図1

図2

とのユーモアを含んだ対照が明らかに意図される五八―五九ページの見開きの構成などに顕著に認められるように思われ、同時に、『津軽』の編集においては、そうした小島の特質を十分に反映する工夫が企図されていることも明らかであろう。

ただし、書籍『津軽』の位相を考えるにあたって、このような小島の編集企図だけを重視してよいわけでもない。『津軽』「あとがき」における石坂は、編集代表者として、「津軽の案内書」と「受け取られることを避けて編集をすすめて来た」と自らの編集意識について述べ、また、後にはさらに踏み込んで次のようにも発言している。

> 高木君のことは、いまはそれだけにしておいて、三人の中でいちばん年が若い写真家の小島一郎君は、派手で奇抜な被写体を狙う写真家が多い昨今の風潮には背を向けて、一途に津軽の風土にとり組んできた地味な辛抱強い人である。この人が、カメラを通して何を狙っているかは、津軽のシンボルとも云われる岩木山の晴れた姿が、一枚も「津軽」の本の中におさめられていないことでも察しがつくだろうというものだ[5]。

石坂にとって、「岩木山の晴れた姿」を「津軽のシンボル」的な被写体として扱うことは、「派手で奇抜な被写体を狙う」ものとして批判的に考えられており、「津軽の風土」に取り組む小島の中には、そうではない「地味な辛抱強」さが見出されている。後にも触れるように、小島の写真に対する石坂のこうした理解には、当時の石坂自身の地方表象に対する態度も投影されていると見るべきだが、ここでは、

このような石坂の共感や信頼に基づいて、本書の出版が試みられた、ということをまず確認しておこう。

今一度、石坂の「あとがき」に立ち戻る。本書を「ほとんど類書のない」「特殊の内容の本」と規定する石坂は、その読者に向けて次のような期待を述べる。

> で、私たちが、この本の読者に期待するものは、この本の写真から、方言詩から、文章から、そしてその三者の絡み合った風韻の中から、「津軽のエスプリ」（この言葉は、漂泊放浪の詩人・福士幸次郎氏が好んで用いたものだ）を汲みとって欲しいということである。雪の多い津軽の風土とそこに住みついている人々のド根性・魂い――。そういうものに共感をもって欲しいということである。それはやがて、ひろく日本のエスプリにも通じる一つの道程にもなるものだと思う[6]。

本書のメッセージの核心として「あとがき」が示す「津軽のエスプリ」は、福士幸次郎の好んだ言葉として引用されている。この用語は一九四五年以前から現在に至るまで青森における地方文化運動のキャッチフレーズのように用いられることもあるものだが、意外なことに、管見の限り福士幸次郎自身による用例は存在しないようだ。その代わりに、ここでは、石坂による次のような用例を参照しよう。

> 之を要するに、青森県の県民性は、今日の所、玉石混淆の素朴な状態にある。之を鍛錬して見事な玉を大成するのは一に県民の自覚と努力にまつばかりである。而して、将来発展の母胎をなす気質は「汝何ダバ！」といふ負けじ魂のほかにはない。すでに今日と雖も、軍隊のやうに個人的な我

儘のきかない所に入れられると、青森県民の素質は極めて優秀であることが認められている。事変に伴ふ今次の新体制の運動の如きは、県民性を陶冶してその地力を発揮すべき絶好の機会であらう。すでにその萌しが現はれかけてゐる！

輝やけよ、津軽エスプリ！　頑張（ケッパ）れよ、青森県民[7]！

一九四一年に書かれたこのエッセイでは、いわゆる「新体制」下の日本の社会状況において、東北の一地方たる青森が有するとされる特質に、戦時体制国家の最も重要な役割を担い得る優性が見出されようとしている。これは、郷土アイデンティティに対する劣等視を戦時下のナショナリズムの亢進に乗じて反転しようとする言説として、河西英通が指摘する、総力戦体制下の東北表象言説[8]の典型的なひとつに数えられよう。すなわち、ここに使われる「津軽エスプリ」の語は、同時代的な地方ナショナリズムの象徴的な表現だと言ってよい。

先の「あとがき」における「津軽のエスプリ」の語が、この一九四一年の文章と同じく地方ナショナリズムの文脈において用いられているとするならば、それが「ひろく日本のエスプリにも通じる一つの道程にもなる」とされていたことの理路も自ずと理解されるのかもしれない。しかし、当然のことながら、一九六三年の東北は「新体制」下にあったわけではなく、地方をめぐる言説環境も一九四一年のそれとは異なる。では、なぜ、どのような経緯のもとに、「津軽（の）エスプリ」は一九六三年の『津軽』に再浮上することになったのか。

本稿の目的は、従来さほど重要視されてこなかった石坂の言説に寄り添いながら、『津軽』の地方表

象としての帰趨をたどることにある。一九三〇年代以降の青森における地方文化運動の文脈を踏まえつつ、一九六三年に本書を囲繞していた地方表象言説の状況を明らかにすることで、タイトルにも示された「詩・文・写真集」としてこの書籍を捉え直してみたい。

二　戦時下の「津軽のエスプリ」

石坂と、『津軽』の「あとがき」で名指されていた福士幸次郎との間に取り持たれた関係としてすぐさま想起されるのは、福士が主導した「地方主義の行動宣言書」（一九二七・二）発行に石坂が同人として加わっていた、という事実である。ここでは、福士幸次郎の地方文化運動の概要をたどりながら、彼と石坂との関わりについて確認しておきたい。

福士が地方文化運動を強く唱えた時期は、一九二三年の関東大震災による疎開帰郷以降の五年程度、一九一九年のパストラル詩社の結成から数えてもおおよそ一〇年程度に過ぎない。しかし、その活動を支えた地方主義の思想は、伝統主義からファシズムへと至る福士の思想的展開の中に強い脈絡を持っていた。

> 我国にフランスの伝統主義を紹介したのは、大正六年以降これに努めた太宰施門であり、ついで大正十二年には福士幸次郎によって青森県津軽地方を根拠に地方主義運動が創始された。これによつて我国に於ても伝統の講究は熱心に行はれてゐるが、その実体を何に置くべきかといふことは、未だ見解が個々に分れて決定を見ない。更にこれを主義として哲学上の位置に上せる時、その方法

たる独断主義と実証主義とが如何に適用されるかは未だ問題となるには至らぬ。而も思想の悪化が叫ばれる今日、愛国思想、国民思想の樹立は当然のこととして要求されるが、その確実な根拠の設定する限り、これ等の方法の厳然たる存在の要請さるべきことは明白な事実であり、それなき限り、今日のファッシズムが哲学上の根拠なしと譏られる如く、冷遇されることを免れないであらう[9]。

上に掲げたのは、一九三三年に百科事典における「伝統主義」の解説として福士が執筆したものであり、ここに見られる伝統主義理解には、日本ファッシズム聯盟の発足に加わった後の彼が自らの運動の軌跡を意味づけようとするが故のバイアスが掛かっている可能性を考慮する必要はある。ただ、「伝統主義」の実践形態として「地方主義運動」が定義され、それによってこそ「愛国思想、国民思想」の「確実な根拠」は形づくられる、という、以降の福士の地方主義運動を一貫するロジックは、ここに明確に示されていよう。この意味で、福士のファシズム論を「地方主義のスケールを国内一地方から一国家レベルにまで引き伸ばした」ものと捉える河西の議論[10]は正鵠を射たものと言える。

そして、この福士の思想的展開を動機づけているのは、社会主義批判に端を発する、「純粋理論」一般への強い批判意識であった。福士の地方文化運動出立の宣言文とも見做すことができる、一九二四年の「地方文化パンフレット発刊の趣意書」にも、そうした意識は明確に示されている。

わたし共は地方を根拠とし、その地方的特色を発現した文化運動の実行が、他の如何なる精神運動にもまさつて切要であることを高唱致します。元来思想も芸術もその土地、並びに土地の人間に

適合しないで真に完全に成立つものでない以上、地方的に特質化され得る可能性乏しい文化論なぞは、至極存在の意義の隔つたものと信じますが、近年来わが国に盛んに唱道される文化主義なるものは、その起因は西洋近代の燦然たる文化をひたすら羨望し、これと同化せんために生れて来たものなので、われ等の要求する事実論、実際論、実証論を離れたる純粋理論の追求にのみ、これ等文化主義者の考察は専一にされ、世界に於ては民族的特質、国内に於ては国内各地方人の地方的特質などといふ、文化成立の必然の根拠体を見返りもしない空虚さは、吾れ等の見通がし得ない憾みであります[11]。

「文化主義」の唱える「純粋理論」は、「文化成立の必然の根拠体」としての「民族的特質」ないし「地方的特質」を考慮しないものとして厳しく批判される。ここに想定されている「民族」と「地方」との自由な連続性は、先の伝統主義理解にも見られたものである。それらと「思想」「芸術」とを結びつけるとされる「事実論、実際論、実証論」の内実は、この文章においては必ずしも明らかではないが、これにやや遅れる一九三二年の執筆とされる「地方主義前論」[12]では、「ロマンチックな憧憬精神、若くはセンチメンタル一点張りの狭隘な心情」と対照される形で、「大事実」としての「人間の社会的結合」を説明するものとしての「地方主義」、「明白な現実的根拠と組織の上に立つ」「郷土愛」が提示されている。

これらのテクスト群に照らすならば、この時点の福士にとって、「郷土愛」が帰着するところの「伝統」とは、習俗や慣習といった何らかの個別的な事象ではなく、「秩序」、すなわち、「人間の社会的結合」の「内部関係」として、人間が環境に拘束されるシステムそのものを意味していた、と言えよう。実体的個別

的な事象ではなく、社会的な拘束それ自体を問題にするからこそ、「民族」と「地方」とは文脈に応じて自由に置き換え得る。こうした「伝統」観、社会観には、福士のアクション・フランセーズ理解が大きな影響を与えている。人間の自律的な理性が信用できない場合、環境による拘束が存在することこそが「実質」として重要である。したがって、「文化主義」的な「純粋理論」は、そうした拘束から免れ得ると夢想している限りにおいて信ずるに足りないものである。こうした、いわば反近代的な社会観こそが、福士がアクション・フランセーズから受け取ったものであった[13]。

以上にたどってきた福士の地方主義思想の特質は、近代的な普遍性への強い反発を持っていたこと、秩序や関係性による拘束を重視していたこと、そのことによってほとんど互換性と言い換えられるようなナショナリズムとの強い連続性を保っていたこと、の三点に要約できるだろう。

先にも触れたように、石坂は、一九二〇年代後半からこうした福士の主張の影響圏内にいたと思われるが、地方なるものの概念に多少なりとも踏み込んだ論及を彼が始めるのは、一九三〇年代中盤以降のことのようである。たとえば、一九三四年に発表した「短い感想」[14]においては「農民の生活を描いた文学が都会に生活の根拠をもつ文学者の手によって描かれる」ことへの不満を述べ、また、一九三八年の「冬景色」[15]においては社会科学的な分析が通用しない「田舎の生活」の排他的な固有性を「事実」として提示している。

左派イデオロギーに対する石坂の拒否感のすべてを福士に関係づけることは勿論できないが、これらの文章の中、たとえば「冬景色」に見られる「新思想」への警鐘などには、福士の反社会主義的地方主義との共鳴を聞き取ることもできるようには思われる。しかし、先に確認したような単純かつ明快な論

理によって一貫していた福士の地方主義の主張に比較して、この時点での石坂のそれは、幾分場当たり的で素朴な、周縁的立場の弁護、という段階に留まっていると見るべきであろう。

そうした中で、石坂の地方論が最も福士に近接したとみられるのは、むしろ、地理的な意味での地方を直接的には問題としないかに見える、次のような文章においてではないか。

純文芸の礼讃者達は我が国に於ける通俗小説の氾濫を眉をひそめて慨嘆する。しかし、さういふ彼等自身が、丁度大衆が通俗小説の中で少しも芸術化されない、義理や人情の匂ひに触れるのを喜んでゐるのと同じやうな態度で、純文学の中に、新鮮ではあるが大分生硬らしいエスプリや意義等を求めてゐるのではないだらうか。世界の文学に類例が無いとか云はれる随筆風の私小説が我が文壇だけに豊かにおほどかに存在し得る根拠も結局は此の倫理性に帰着するものだと思ふ。従つて、日本の文学はこの姿勢を脱却しない限りは、国際的な性格を具備することは不可能だといふ結論に達する訳だ。

この小文の書出しが、外国人に日本の文学が分るか否かというふ問題で始められたために、外国の小説を基礎にして日本の文学を誹謗するやうな勢ひになつたが、自分の云はうとする真意は、寧ろ今の所、自分達の文学は外国人に分つてもらはなくともいゝのだ、といふことにある。観念の上だけでいくら焦つてみた所で根本の生活精神に今日程度の隔たりがある限り、ひとり文学だけが彼我相通ずる魔術的な性格を培養し得る道理がない[16]。

日本における「純文芸」待望論を批判する一九三七年のこのエッセイの基本的な姿勢は、「国際的な性格」とはかけ離れた「倫理性」を日本の「生活精神」に見出すこと、換言するならば、近代的「観念」の及ばない「地方」として「日本」を措定することにある。ここに見られるのは、福士の地方主義に見られた「純粋理論」的な普遍性批判と同型の、地方主義的なナショナリズムだと言えるだろう。

ただし、ここまでに見てきたような福士、石坂両者の地方論は、同時代を俯瞰するならば、決して珍しいものではない。「新体制」下の地方文化運動方針として示された「地方文化新建設の根本理念と当面の方策」（一九四一・一）には、「あくまでも郷土の伝統と地方の特殊性とを尊重し、地方地方がその特質を最大限に発揮しつゝ、常に国家全体として新たに創造発展すること」「従来の個人主義的文化を止揚し、地方農村の特徴たる社会的集団関係の緊密性を益々維持増進せしめ、郷土愛と公共精神とを高揚しつゝ、集団主義文化の発揚をはかり、以て我が家族国家の基底単位たる地域的生活協同体を確立すること」が明確に示されていた[17]。両者の地方表象言説は、結果として時局的な枠組みの中に落ち着いていったものと見なせよう。

伝統主義時代から福士の思想に随伴していたアンチ・テーゼとしての性格は、「地方的特色を発現した文化運動」（「地方文化パンフレット発刊の趣意書」）なるものの実質を流動的にし、運動としての輪郭を捉え難くさせていた（実際に、このパンフレットには、行動プログラムとして八点もの目標が掲げられていたが、その全てが目立った具体的な成果をあげることなく終わっている）。そうした事情は、地方在住／出身作家としての立場から中央文壇の動向に反応しようとしていた石坂においても同様であっただろう。しかし、そのことによってこそ、福士、そして石坂の地方主義、「津軽のエスプリ」は、

戦時下の「民族的精神」へと容易に接続されていったのである。

三　一九六〇年前後の地方表象言説と『津軽』の成立

河西英通は、一九四〇年代の津軽を例に採りつつ、地方表象言説を〈地方〉〈田舎〉〈郷土〉の三類型に整理してみせた。河西によれば、福士幸次郎に代表される〈地方〉的な言説は、「一国の文化を反映させる基盤」として地方を捉え、また、太宰治に代表される〈田舎〉的な言説は、アナーキズム志向、桃源郷願望の対象として夢想化された空間として地方を捉えるのに対し、秋田雨雀に代表される〈郷土〉的な言説は、階級がせめぎ合う場として地方をとらえ、それを資本主義的都会文明から守られ、救われねばならない空間として措定する。

〈郷土〉派の秋田雨雀は、敗戦から約一ヶ月後の『東奥日報』紙上で、「労働基地、生産基地としての東北地方、殊に青森県の生活文化」の重要性を説き、「地方文化の創造」を訴えた（一九四五年九月十三日付「新建設と文化」）。この場合の「青森県」とは、〈地方〉派の福士幸次郎が言うような「誇り」高い存在であっただろうか、あるいは〈田舎〉派の太宰治が夢想したような桃源郷であっただろうか。同じく〈郷土〉派の大沢久明は「本県は日本中で一番貧乏で、従つて一番文化の遅れてゐる地」「体のいゝ植民地みたいな地方」とのべて憚らなかった（『東奥日報』一九四五年十一月九日付「建直す青森県」）[18]。

本稿がここまでに確認してきた、一九四〇年代前半までの福士、石坂の地方表象言説との接続を確認するために、地方と「日本」との関連という視点からこの三類型を改めて整理するならば、〈地方〉は都市とは異なる真正な「日本」モデルを示すべきもの、〈田舎〉は「日本」とは別になるべきものであり、そして〈郷土〉は都市によって地方に押し付けられた「日本」の歪みが克服されるべき場所であった、と換言できよう。

河西は、「戦後民主主義のスタート地点で、青森県は日本経済の基盤的地域と位置づけられ、中央や他地域に比べると、封建的で後進的であり、その社会的特性は克服されなければならない」という「近代化と都市化の論理」によって「〈地方〉と〈田舎〉の視点は否定された」と論じている[19]。そうした観点から一九四〇年代後半の石坂の言説、たとえば、一九四五年一一月には「私共の国家組織や社会制度がそんなに立派なものであつたならば、私共は今日の悲惨な破局に当面せずに済んだ」として旧来の日本社会の欠陥を指摘し[20]、また一九五一年に書かれた別の文章では「キモノよ、ゲイシャガールよ、ヨシワラよ、お蝶夫人よ、古い日本よ、さようなら！私共はみんな力を合せて、新しく明るい国つくりにはげみたいものである」と明朗に呼びかける[21]ようなそれらを見るならば、彼の地方に対する立場は、一九四五年八月を境にして、〈地方〉的なものから〈郷土〉的なものへと速やかに移動していったかにも思われる。では、変節とも捉えられかねないその変化を彼に可能にさせたものは、一体何だったのか。

磯田光一は、葛西善蔵からの離脱によって「私小説」的な自己卓越化から「庶民意識」へという転向を一九三〇年代に既に終えていた石坂に、戦争は「何も教えなかった」と説く[22]。いささか逆説めくが、ほとんど何の屈託も含まないかに見える石坂の変化を可能にしていたのは、磯田が指摘するような、石坂

における「庶民意識」の一貫性ではなかったか。

先に確認したように、一九三七年には「根本の生活精神に」「隔たりがある」のだから「自分達の文学は外国人に分つてもらはなくともいゝ」と主張していたはずの石坂は、一九四〇年代後半には次のように述べていた。

> で、私が気短に敲きつけたい結論は、小さい島国の中で、他民族と切磋琢磨する機会もなく、窮屈な政治機構の下でその日暮しをつづけてきた私共には、捨てて惜しいやうな生活の習俗などほとんど無いのだ、といふことである。小説はその国の習俗を反映する。現在の日本文壇の標準で、これが傑作だ、これが秀作だといはれる作品ほど、外国人に通じ難いものである事実を考へても、私の意見が必ずしも敗北的な暴言ではないと信ずる[23]。

ここでも、わずか一〇年足らずの間に、真逆の「結論」が導かれたことになる。しかし、日本文学の国際的な普遍性の如何を論じるこのふたつの文章は、何らかの思想や理論ではなく、現にそこに暮らす人々、その生活や習俗が、日本の文学の性質を規定する、という議論の前提条件を共有している。そこでの「自分達」「私共」は、「日本」の実質を形作るもの、磯田の言葉を用いるならば「庶民」として領域化され、均質に包含される。「庶民」によって支えられる「日本」という理念は、全体がそれ自体周縁的な共同体として見なされることはあるとしても、その内部には周縁化される人や場所を含まない。どこに住まおうが「庶民」が「庶民」であることに変わりはない。

石坂が一九四六年に書いた「地方文化の問題」は、「地方新聞」の「面白くな」さを、「急激な国家組織の改革や社会制度の改新を本質的に把握して、大衆を啓蒙指導し得るやうな人材」の不足に求めた上で、次のように断言していた。

今日の日本には特に地方的な問題といふものは存在しない。従来考へられてゐた地方の特殊性といふものは、有史以来の大変革の激浪を浴びせられて一時姿を消した形である。地方の問題は直ちに中央の問題であり、中央の問題は直ちに国家全体の問題である。厳密に云へば、この関係は平時でもさうしたものであらうが、しかし今日の中央と地方は、直結といふ表現を用ゐても距離を感じさせるほど、一体不可分のものとなつてゐる[24]。

「特に地方的な問題といふものは存在しない」、「地方の特殊性といふものは」「姿を消した」というこれらの高揚した宣言が、同時期の石坂の〈郷土〉的な立場を端的に示すものであることは明らかだろう。「戦後民主主義者」然とした彼の振る舞いを支えていたのも、一九四五年以降の社会においても、「庶民」の住む場所としての「日本」が地方を包含し、内部化しているという、彼の確信の強さに他ならなかった。

しかし、一九五六年、そうした高揚に冷水を浴びせかけ、確信を揺るがすような出来事が彼に訪れる。

「楢山節考」が掲載された「中央公論」十一月号の巻頭のグラビアには、津軽半島の突端にある龍飛部落（たつびぶらく）の人達の貧しい生活が写し出されている。魚もロクにとれず、耕す土地もない。殖えるも

のは栄養のわるい子供達ばかりで、若者達は一たん部落から出て行くと二度ともどりたがらない。そして貧乏のシワヨセに、男達よりも、家を守る女達の上に重くのしかかっている。――そういう所では、本誌の読者たちが抱いているような暮しの考え方は通用せず、恐らく人々は、私どもの想像外の迷信や偏見の中で暮しているにちがいないのである。環境がそれを余儀なくさせているからだ。つまり、昭和三十二年の今日も、津軽の龍飛部落には、楢山節ならぬ龍飛節が唄われているということになるのだ。

私は「楢山節考」を読んだあとで、龍飛部落のグラビアを眺めて、なまなましい現実感にとりつかれ、気がめいってまいった。津軽は私の郷里であるせいもあるだろう[25]。

発表当時から大きな話題を呼んだ深沢七郎「楢山節考」は、たとえば平野謙に「ピラミッドの底辺に一種底なし沼のようによどんでいる」「日本のどうしようもない古さ」について「一応は承知しながら」「実相についてはほとんど具体的に知らない」という「私どもの知的問題を的確につい」たものとして評価される[26]など、近代的な視線には捉えられない前近代的、民俗的な世界を描き出したものとして受け止められた。中谷いずみが適切に指摘するように、その評価を巡って問われていたのは、「一九五〇年代初頭の「国民文学論争」でトピックとなった「民衆との接合」をめぐる問題」だった[27]と言ってよい。

しかし、石坂に寄り添う形で「楢山節考」をめぐる議論を見直すとき、そうした「民衆との接合」という議論自体がある種の立場性を担保して行われたものであったことにも気が付かざるを得ない。

石坂が一九五七年に発表したこの文章に採り上げられる、一九五六年一一月号『中央公論』に「楢山

節考」と共に掲載されたグラビアとは、当時の日本フォトジャーナリズムを牽引していた濱谷浩による、「津軽半島・龍飛部落　海の家族を見る」と題された七ページの記事であった。六点の写真に文を添えたその記事のタイトルページには、海に高くせり出した異形の岩が接写され（このページは石坂の文章が掲載された『婦人公論』誌面にも引用された）、続く写真には、漁村の厳しい生活が家屋の内部までに入り込むレンズによって写し出されている。そこに添えられた「日本の縮図のように、ここにも緩慢ながら貧しさからの自壊作用が起きている」「部落を歩いても、家の中を覗いても、漁村独特の活気がない。やたらに子供のみ多いが溌剌さがない。農山漁村の共通のテーマである家族計画や、栄養面などの生活改善は着手されてない」といったキャプションも、写真に込められた濱谷のジャーナリスティックな企図を強調していた。

この記事の撮影は一九五五年一月に行われたものと推定されるが、後の濱谷は、その撮影行について次のように振り返っている。

> 一九五四年、私は「裏日本」の撮影にとりかかった。
> その二年前、汚れた雪の残る高田から、明るく健康な大磯に移り住み、虚栄に映える東京の急激な発展を見るにつけ、東京と地方のアンバランス、文化の落差を痛感していた。[…]十月、冬を迎えようとする新潟に第一歩を進め、翌年一月、本州北端、陸地の果て、津軽半島竜飛集落に行った。六十一戸の集落は、岩と、波と、風と、雪の、凶暴な海と崖の狭い土地に、必死の相でかじりついていた。[…]私は風土と人間の関係を、単に宿命としてとらえるのではなく、今日の日本の多重構

造に対する問題提起としてもやらなければいけないと思った。戦争は日本人の意識を大きく変えた。山の奥の集落社会も、いやでも応でも供出や配給制度によって、政治経済と接触することになった。だが政治は彼らのために何をしたのか[28]。

ここで濱谷が語り出しているのは、地方を撮影対象とする際の自らの問題意識の所在である。発展する東京としわ寄せを受ける地方とを対比し、地方の苦渋を宿命的なものとして諦め受け容れるのではなく「日本の多重構造」に起因するものとして問題提起を行うこと。こうした意識を持っていた濱谷は、先の河西の示した類型に照らすならば〈郷土〉派のひとりの典型として考えることができそうだが、同時に、そこに彼にとって必然的な批評性が一貫していたことも疑い得ない。

しかし、そうした濱谷の批評性は、石坂にとって、自らに差し向けられた外部からの視線として受け止められていた。「楢山節考」と「海の家族を見る」とを併せ読んだ石坂の胸中を支配したという「なまなましい現実感」の中に、「民衆」という他者をはるかに見やる距離の感覚を見出すことは不可能だろう。そうではなく、自分こそが「民衆」として他者化され対象化されている、という実感こそ、石坂に「現実感」をもたらしたものである。自らを「庶民」として内部化していたはずの境界線は、ここで明確な輪郭を伴って自らの前に引き直されており、「民衆」をまなざす側の立場に自らを置くことが、石坂には許されていない。

こうした衝撃と反感とを感じていたのは、石坂だけではなかった。高橋しげみは、『津軽』出版直前の小島のインタビュー記事[29]を踏まえながら、濱谷によって牽引された「地方に残る後進地域の写真」、

すなわち「「さいはて」写真」ブームに対して、小島が「強い抵抗」を覚え、「そうしたまなざしに抗う風景を示す必要性を感じ」ていたことを指摘している[30]。

写真家としての小島のモダンな資質や造形的な志向、あるいは編集構成の手腕を、石坂が果たしてどこまで理解していたか、定かではない。しかし、彼が小島に寄せた共感や信頼が、こうした「さいはて」写真のような、自らを外部化しようとする言説への強い反発に由来するものだったことは確実だろう。石坂は、『津軽』発刊直前のエッセイにおいて、ここでも「津軽人のエスプリ」の語を用いながら、地方に向けられる「見世物」的な視線への「憂」いを表明している。

私共はこの本で、津軽の風土、津軽人のエスプリといったふうなものを内面的に紹介し、それぞれの郷土を愛する人々にその一つのパタアンを示すことが出来ればと願っているのである。

さて、文章を受けもつ私――石坂については、彼は通俗的に著名だから、ここには一言も記さない。ただ、私の憂えていることを一つだけ云わせてもらえば、地方の行事、風俗の珍しいものは（例えば下北半島の恐山のイタコ祭。むかし私が住んでいた横手市のかまくらなど）、見物人や写真家が殺到して、しだいに見世物化しつつあることだ。いまの調子でいけば、あの風俗もこの行事も、しまいにはアイヌの熊祭りのような味気ない見世物に変り果ててしまうであろう[31]。

ここに「写真家」が名指される背景には、一九五六年の「なまなましい現実感」が石坂の中でなお持続していたことを見るべきだろう。すなわち、石坂にとっての『津軽』刊行の企図は、一九六三年の津

軽を、誇り高い〈地方〉としてもう一度描き出すことにあった、と言える。

四　おわりに

〈郷土〉の啓蒙者として振る舞うことをやめ、〈地方〉の当事者として語ること。そう考えた石坂にとって、本書『津軽』が「津軽の案内書」であってはならないのは当然であり、そこに同郷の写真家小島を起用すること、そして「あとがき」に福士の名を呼び起こすこともまた、必然的な成り行きであった。福士の地方主義が、地方の実体的かつ個別的な事象にその基盤を置かなかったことは、既に述べた。先の引用とは別の箇所で、福士はそのことを「関心」という語を用いて説明している。

> 重大事は寧ろ社会形成の根拠が恁うして必ずしも合理に赴かざる処から発し、然も争ふべからざる必然関係からそれ自身の独特なものに独り熱切であり、必須である処の「関心」が自己民族の為めに、或は自己所属の地方の為めに燃えてゐる事である。この場合、関心とは何であるか、例を以て語らしめよ。市俄古人が他の米国の都会人に市俄古を悪く云はれたら自分が何だか馬鹿にされたかの様に感じ、吾が心の汚された如き思ひを感じるだらう。これが地方的関心である。ところで更に此の他の都会人も、また市俄古人其者も、今度は米国人以外の者から米合衆国を嘲けられた時は、共に米国人としての怒りを感じるだらう。之れは民族的関心である[32]。

ここでの「合理」とは実体としての事象を指すものとして、「関心」は当事者としての立場性を指す

ものとしてそれぞれ理解することが可能だろう。福士の地方主義に際立った特徴は、こうした立場性への強固なこだわりに他ならず、そして一九五七年の石坂が突如として〈地方〉言説の側へと立場を翻したのも、〈郷土〉的な地方表象言説による外部化によって地方の当事者としての立場性を突きつけられたためであった。

事実、石坂は、自らの既発表作を『津軽』に再録するにあたっても、同様の趣旨に基づく周到な改変を施していた。『津軽』の「あとがき」において石坂は、高木、石坂の本文について原則として「原形のままを用いる」が「石坂の文章の場合は、少ない行数で首尾を整えるために、少しばかり削ったり加えたりした箇所もある」と述べているが、これは事実を正確に説明するものとは言い難い。石坂の場合、『津軽』の場合に限らず、単行本収録等の機会に自作を屢々書き換える習慣をもともと持っていたようだが、たとえば岩木山信仰を語る「お山」[33]を『津軽』に部分再録する際にも、ほぼ改作と言ってよいほどの大幅な変更を加えている。一九六三年時点の最も新しいヴァージョンのテクストであった一九五九年九月発行の新潮文庫『わが日わが夢』掲載の「お山」本文と、『津軽』掲載のそれとを比較するならば、前者に存在した「彼等のこうした汎神論的な傾向」や「農民達が祈願に奉ずるのは、これ等物々しい祭神ではなくて、どうやら刃物をふりまわす方の土着の神様であるらしい」といった地方を対象化し分析する文言は『津軽』再録にあたって削除され、「彼等の心の中では、この山に対する親しみの気持が一つの信仰にまでたかまっているのも、決して不自然なことではない」という、地方を代弁し、その正当性を主張するような文言がそれに置き換わっている。

とはいえ、一九六三年の石坂が、完全なる〈地方〉主義者へと回帰し得た、というわけでもまたなかっ

た。高木の方言詩を指導した福士は、一九三一年に高木の詩集『まるめろ』に付した「序」において、「地方人は先づ其の命に響く言語として吾が地方語を誇りを以て護れ」と強く呼びかけていた[34]。『津軽』に再録された高木の方言詩も、『まるめろ』から採られているが、石坂は、『津軽』収録の「津軽の方言」において、次のように述べている。

> 最後に、方言にはもちろん、方言独特の素朴な力強さと磨かれた美しい音韻がある。それらを見事な芸術品に結晶させたものが、本書にその一部が収録されている医学博士・高木恭造君の津軽方言詩集「まるめろ」である。こういうすぐれた方言詩は、全国に比類がないばかりでなく、青森の烈しい情熱をぶちこんで「まるめろ」の諸篇を唄い上げた高木君としても、二度と生み出すことができない性質のものであると思う。なぜなら、津軽とかぎらず、全国的に、方言を育くんだ生活――したがって方言そのものが、かなり急速に変貌し、衰弱しつつあるからである[35]。

福士と、一九六三年時点の石坂との懸隔は明らかだろう。「かなり急速に変貌し、衰弱しつつある」〈郷土〉を認識しながら、もはや「二度と生み出すことができない」〈地方〉を語っている石坂は、一九六〇年代における地方表象言説としての『津軽』の限界についても、十分に自覚的であった。

しかし、そうした隘路をくぐり抜ける道は、果たしてあり得たのだろうか。東京オリンピックを翌年に控え観光基本法を成立させていた一九六三年の日本における地方表象言説はもとより、実質的な文学的活動の終焉に差し掛かろうとしていた石坂、「さいはて」としてまなざされるのではない「北」の表

象を追求しようとして志半ばで病に倒れた小島、朗読ソノシートの発行や朗読会の開催など方言詩人としての活動を活発に繰り広げた高木、それぞれの『津軽』以後の活動にも、その答えは容易に見つかりそうにない[36]。ただ、本稿を閉じるにあたって、『津軽』発行に際して、予め封じられたかに思われる可能性のひとつを確認しておこう。

『津軽』掲載の高木の詩「まるめろ」には、「〈ふぢア死ぬ時（ドギ）の夢〉」という副題がつけられているが、これは、「――死ぬ時（ドギ）のふぢの夢　満州で」という一九三一年の詩集『まるめろ』収録時の形態から『津軽』再録時に改変されたものである。故郷から離れた土地で今際の際にある妻の回想を語りだすこの詩において、その終焉の地が「満州」だったという、高木の伝記的な事実でもある要素が、なぜ再録にあたって消去されたのか、その理由は明確ではない[37]。あるいは、詩の副題として説明的に過ぎるという判断が働いたのかもしれないが、しかしここで「満州」の語とともに見えなくなったのは、地方が、都市や「日本」を介さず、「外地」と直に接続されてもいた、という事態ではなかったか。『津軽』刊行に際して自ら述べていた[38]ように、小島の写真家としてのキャリアも、復員後の虚脱を埋めるかのように始まったのであり、後に彼は開拓村の撮影をも経験していた[39]。これらの事情は決して高木や小島に特殊のものではない。とりわけ帝国主義のもと植民地の拡大が目指された時代において、地方とは「外地」との接触を否応なく強いられた場所でもあり、その余波は一九四五年以降にも継続して存在した。福士的な地方主義の枠組み、そして戦後の「近代化と都市化の論理」によっても決して捉え得ないこうした状況の中には、別様の地方表象が試みられるべき可能性が存在したのではないかとも思われる。

［付記］すべての引用について、字体を適宜改め。ルビ等を省略したところがある。引用中の［…］は引用者による中略を示す。また、下線部は引用者による。石坂、福士のテクストについては初出が必ずしも明らかでないものも多く、それらの引用本文は所収単行本に基づくこととし、引用に際しては、単行本の書誌に加え、本文末尾に執筆年月が注記されている場合それも参考のために併せて記した。

1　「石坂洋次郎編「津軽」」（『読売新聞』一九六三・一〇・三一　夕刊）
2　石坂洋次郎「自画自讃」（『新潮』一九六三・八）
3　高橋しげみ「北を撮る―小島一郎論」（『小島一郎写真集成』インスクリプト　二〇〇九・一）
4　高橋しげみ「北を撮る―小島一郎論」（前掲）
5　石坂洋次郎「われら津軽衆なり」（『小説新潮』一九六四・四）
6　石坂洋次郎「あとがき」（『津軽』）
7　石坂洋次郎「わが郷土」（石坂『小説以前』（共立書房　一九四六・一〇）所収　注記によれば執筆は一九四一・七）
8　河西英通『続・東北――異境と原境のあいだ』（中公新書　二〇〇七・三）は、一九四四年九月二四―二七日の『東奥日報』に掲載された座談会「在京県出身者座談会　戦争と地方文化」の中に、「ファシズム体制・総力戦体制といわれる戦時日本において、郷土と国家が一体化・同一視され」「郷土を劣等視しつづけてきた日本や祖国」が消去される言説を指摘し、「地方文化運動の最大の「成果」ともいうべきこうした強烈な郷土アイデンティティー（郷土ナショナリズム）こそが、この地方で総力戦体制を可能にした思想的基盤である」と論じている。
9　福士幸次郎「伝統主義」（『大百科事典』（平凡社　一九三三・五）、引用は『福士幸次郎著作集』下（津軽書房

一九六七・三）に拠る）

10 河西英通「地方主義とファシズム―福士幸次郎の場合―」（『北大史学』二三　一九八二・八）

11 福士幸次郎・菊池仁康「地方文化パンフレット発刊の趣意書」（一九二四・一、引用は福士「地方主義者としての回想」（福士『郷土と観念』一九四二・一〇　育成社弘道閣）に拠る）

12 福士幸次郎「地方主義前論」（『郷土と観念』（前掲）所収　注記によれば執筆は一九三二・一二）

13 福士幸次郎「郷土思想の根柢」（『郷土と観念』（前掲）所収 注記によれば執筆は一九三一・九）は、「祖先に対する感動、祖先が伝へた伝統に対する感動が」「理性の動物ではない」人間の「獣性を抑へて今日の社会を作らせるに到つた」という伝統主義理解を「ブリユンチエール、ブウルヂエ、バレスによつて教へられる処の要点」として述べている。

14 石坂洋次郎「短い感想」（石坂『雑草園』（中央公論社　一九三九・六）所収　注記によれば執筆は一九三四・五）

15 石坂洋次郎「冬景色」（石坂『雑草園』（前掲）所収　注記によれば執筆は一九三八・一）

16 石坂洋次郎「ものぐさ思案―日本文学の一性格」（石坂『雑草園』（前掲）所収　注記によれば執筆は一九三七・一二）

17 「地方文化新建設の根本理念と当面の方策」（一九四一・一）（引用は北河賢三編『資料集総力戦と文化』第一巻（大月書店　二〇〇〇・一二）に拠る）

18 河西英通「可能性としての津軽―〈郷土〉と〈地方〉と〈田舎〉―」（『社会文学』一九　二〇〇三・九）

19 河西英通「可能性としての津軽―〈郷土〉と〈地方〉と〈田舎〉―」（前掲）

20 石坂洋次郎「外地で見た日本映画」（石坂『小説以前』（前掲）所収　注記によれば執筆は一九四五・一一）

21 石坂洋次郎「キモノ」（初出未詳　石坂『私の手帖』（中央公論社　一九五八・一）所収　注記によれば執筆は

一九五一・一）

22 磯田光一「石坂洋次郎の転向」（『文藝』一九六三・九）

23 石坂洋次郎「敗戦の歳暮―古い習俗を否定する」（石坂『わが道を往く』（たいまつ新聞社　一九四九・一一）所収　注記によれば執筆は一九四六・一〇）

24 石坂洋次郎「地方文化の問題」（石坂『小説以前』（前掲）所収　注記によれば執筆は一九四六・二）

25 石坂洋次郎「偏見と迷信」（『婦人公論』一九五七・二）

26 平野謙「今月の小説ベスト3」（『毎日新聞』一九五六・一〇・一八）

27 中谷いずみ「「民衆」という幻―山本健吉の近代主義批判と『楢山節考』―」（『日本文学』二〇〇七・一一）

28 濱谷浩『潜像残像　写真体験60年』（筑摩書房　一九九一・二）

29 「『津軽』近く出版」（『東奥日報』一九六三・五・三〇）

30 高橋しげみ「北を撮る―小島一郎論」（前掲）

31 石坂洋次郎「自画自讃」（前掲）

32 福士幸次郎「地方主義前論」（前掲）

33 『改造』（一九三四・四）に初出。

34 福士幸次郎「序」（高木恭造方言詩集『まるめろ』「北」編輯所　一九三一・一〇）

35 この文章（「津軽の方言」）は、基本的には「「海のあなたに牛が棲む」わがふるさと・弘前市」（石坂『ふるさとの唄』（講談社　一九六五・一〇）所収　注記によれば執筆は一九六二・一〇）の部分再録だが、ここに引用した箇所については、該当する記述が単行本、『文庫』に見当たらず、『津軽』収録の際に新たに書かれたも

のと判断する。

36 大島洋「都市を見る眼差し」(日本写真家協会編『日本現代写真史』平凡社　二〇〇〇・三)は、「都市が都市であり、村が村であるということが、自明なこととして捉えられている」写真から、「撮影の対象がどんなものであっても、社会的な責務とか告発ではなく、敢えて付け加えれば報道や記録への至上主義でもなく、とても私的な記憶や経験であるとか、そのような感性とものの考え方が写真を撮ることの動機の中心にあって、その底流には、都市や国家や世界と向かいあっている写真家それぞれの固有の生き方が、言葉に置き換えられないようなメッセージとして、いわば視覚のゲシュタルトとして感じられる」写真へという潮流の変化が一九六〇年代日本に生じたことを論じている。これは、「戦後派」から「内向の世代」へと向かった文学の潮流ともある意味で軌を一にしているかに思われる。

37 以降の再刊(『方言詩集まるめろ』津軽書房　一九六七・一〇)等すべての版で、この改変は放棄され、一九三一年版と同様の副題が付されている。

38 小島一郎「私の撮影行」(『津軽』)

39 本書第一章高橋論文を参照。